

生薬ニュース

近畿大学東洋医学研究所附属診療所調剤室



〈黄芩の花〉

今回のピックアップ

おうごん
黄芩

オウゴンって？

オウゴン（黄芩）とは、コガネバナ *Scutellaria baicalensis* Georgi（シソ科）の周皮を除いた根で、主に中国北部～東シベリア、朝鮮半島原産アジア各地で栽培され、山西、内蒙古、山東、河北、および東北の各省に産出します。

掘り返した根は、コルク質の外皮で覆われており、それを取り除くことで黄色の根（次ページ写真参照）が出てきます。また、根自体は“黄芩”の名の通り黄色なのですが、地上部の花は左上写真のようにきれいな紫色を呈しています。

黄芩は上述のとおり、シソ科の植物です。しかし、例えば紫蘇（シソ）や薄荷（ハッカ）、ハーブではミント、ローズマリー、タイム、ラベンダー、セージなどのほかのシソ科の植物と違い、地上部も地下部も全くの無臭です。

【紫蘇】



【ローズマリー】



【セージ】



オウゴンの成分は・・・

黄芩に含まれる主成分の一つとしてフラボノイド（オーゴニン・バイカリンなど）がよく知られています。その含有率は10%を超えるほどで、これは黄芩独特の特徴です。他の生薬は色々な成分を含み（フラボノイド、アルカロイド、精油成分など）、含有率もどれも10%以下である場合が多いです。例えば、麻黄に含まれるエフェドリンの含有率は0.3%～1.5%であり、このことから黄芩の主成分の含有率の桁違いに多いことがうかがえます。

オウゴンの役割は？

主な薬理作用として、抗炎症作用、抗アレルギー作用、胆汁分泌促進作用、粥状動脈硬化防止作用など、他にも生薬ハンドブックには多岐にわたる薬理作用が記載されています。

【薬能：^{せいねつそうしつ}清熱燥湿、^{しゃかげどく}瀉火解毒、^{りょうけつしけつ}涼血止血、^{あんたい}安胎】

生薬ではその味や性質についてもそれぞれ分類されます。これを“性味”といいます。黄芩は、『苦、寒』と表現されます。『苦はよく湿を燥し、寒はよく熱を清す』とされ、清熱燥湿の効果が強いとされています。

様々な薬能（＝薬効）を持つ黄芩は、たくさんの処方に配合される要薬として知られています。また、**柴胡剂**（柴胡含む処方）にも多く含まれ、炎症性、免疫性疾患等に頻用されています。

オウゴンと小柴胡湯

以前、**小柴胡湯**（主に感冒や慢性肝炎などの症状に使用される）の副作用として間質性肺炎が大きく報道されたことがあります。この時、小柴胡湯の主要生薬のひとつである黄芩が注目され、それに多く含まれる主成分が原因によるものと推定されました。しかし、その後、黄芩を含まない処方でも間質性肺炎の副作用報告が増えてきて、この問題の真相は不明のままです。

生薬も薬ですので、副作用が起こる可能性も忘れずに使用する必要があります。

オウゴンを含む方剂：

^{うんせいいん}温清飲 ^{おうれんげどくとう}黄連解毒湯

^{さいこかりゅうこつぼれいとう}柴胡加竜骨牡蠣湯

^{さいこけいしかんきょうとう}柴胡桂枝乾姜湯

^{さいぼくとう}柴朴湯 ^{しょうさいことう}小柴胡湯

^{しんいせいはいとう}辛夷清肺湯

^{はんげしゃしんとう}半夏瀉心湯 ^{によしんさん}女神散

